

## 『義経記』正保三年整版本の謎

村上 學 (教授・国文学)

『義経記』版本には、嘗て調査したところによれば次のようなものがある。(注)

古活字本(6種)十一行本・十二行丹緑本・同異植字版・十二行小古活字版・同異植字版・寛永十年刊十三行本。以上の他に少なくとも2種あったことが写本の存在などから推測される。

整版本(13種)①寛永十年西村又左衛門版・②寛永十二年版(絵無〈未見〉・丹緑絵入・無彩色絵入・絵抜後印)・③正保二年版(絵入・絵抜後印)・④正保三年西村又左衛門版(丹緑絵入)・⑤万治二年風月庄左衛門版(絵入)・⑥寛文四年西村又左衛門版(絵入)・⑦寛文十年吉野屋惣兵衛版(絵入)・⑧寛文十三年風月庄左衛門版(絵入)・⑨延宝五年鱗形屋本問屋合版(絵入)・⑩元禄二年須藤権兵衛版(絵入)・⑪元禄十年新井弥兵衛版(絵入)・⑫元禄十二年平野屋清三郎版(絵入)・⑬宝永五年河南四郎右衛門版(絵入)

整版本は①を嚆矢とする。十二行小古活字本を底本にして巻四に相当の改編を施したものである。①から別に版を起こしたのが②、その覆刻が③、それを半面二行ずつ詰めて覆刻したのが⑤、①を覆刻して②の挿絵を模刻したのが④、④の刊記の年記のみを埋木で改編し、絵は新刻したのが⑥、⑥によって版下を新たに起こしたのが⑦、⑦の絵を模刻したのが⑧(本文は⑤を流用)と、覆刻・模刻が続いてゆく。うち流布したのが⑦と⑩で、⑩には無刊記後刷本がある。⑪新井弥兵衛本は巻一から六までは①の本文により特異な版式を持ち、巻七・八のみは②の本文により版式を異にするが、それと同版の完本は管見に入



らない。これも流布したらしく、求版後刷が、中川茂兵衛・弥兵衛版、梅村三郎兵衛版(明治期まで刷立てがある)と少なくとも2種ある。しかも絵の数が各本により異なる。刷り立て毎に手を抜いたらしい。⑫は③の版木に加工した版。⑬は①の本文により新刻。巻六・七・八は巻の分け方が他本と異なる。

これらの調査は『義経記』諸本調査の一環として、『国書総目録』を手懸りに約30年前に行ったものであり、その後調査を怠っていた。国文学研究資料館のマイクロ収集目録にも異なる版は見えていないことから、整版本の版種は網羅したものと思っていたのである。ところが2004年の暮に國學院大學の松尾葦江教授から、同大学図書館蔵の『義経記』整版本4本(同大学図書館のDBに未記載)を調査したところ無彩色絵入無刊記本を見つけた、これは同大学図書館蔵④正保三年(ただし絵抜)と同版、しかも後刷とは思えない版面だとの知らせをいただいた。私は正保三年版は2本見たが、いずれも丹緑本であり、刊記「正保丙戌仲春吉旦/寺町誓願寺/西村又左衛門板行」(子持野)は墨付からして埋木ではない(松尾氏は字面が太いので、埋木ではないかと疑っていた)。同版木の⑥寛文

四年版は年記(「寛文四甲辰仲冬」)が埋木になっており、そこだけ墨の乗りが異なっている。松尾氏の知らせは私のなした整本の整理を根底から覆す可能性のある内容であった。ただ実物を見ない限り、推測をあれこれしても意味がない。

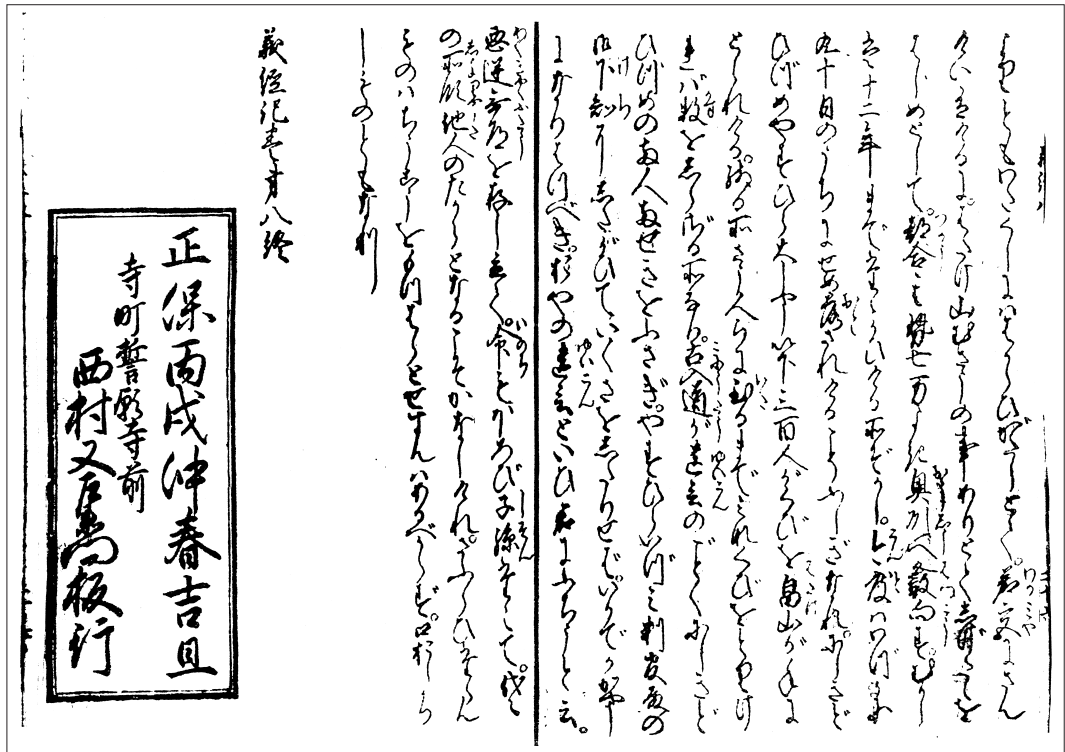
そこで2005年3月、東京に雪の積もった日に同大学図書館を訪問して、調査させていただいた。紺地雷文襷に鳥の古代文様の原表紙、普通仕立ての本で、確かに巻八の末尾には刊記がない。版面も後刷りの様相を示していない。これは困ったことになると思って、本来刊記のある巻八の最終丁をよく見ると、版心(「義経八 廿七」)が印刷されていない。尾題までは刷ってある。つまり、巻八の最終丁は尾題までを墨を乗せて刷り、後半は墨を乗せてないのである(紙に折れ目もなく、ヤレ紙でもない)。なお、寛文四年版の最終丁は正保三年本の版心が残っている。こ

れで私の整理は改めなくてもよいことになった。一安心。

ただ安心ばかりはしておられない。なぜ刊記のないまま本に仕立てたのか。整版本が商品である以上、刊記がないのは瑕疵品である。ウラ面は完全に白紙のまま残っているから、うっかり墨付の不完全のまま丁を折って製本したというのは考えにくい。寛文四年版も同じ版元だから、版元にまつわる事情も考えにくい。謎は深まるばかりである。誰か答えを教えてくださいませんか。

(注)「義経記諸本書誌解題」(一)~(三)

『雲雀野』7~9 1985.3~87.3



義経記正保三年版末尾(二十六ウ・二十七オ)